

目次

国民体育大会に出場して	樋田光次 (昭一六年主将)	2
スポーツマンたる	鬼田正臣 (昭三九年三月卒)	3
馬との四坪面	小錦 武 (" ")	5
北畠尾調教日談 (オニ部)	鬼田正臣	7
北球尾調教の記	八木正巳 (昭三八年主将)	9
部員の首さんへ	鎌田正入 (昭二八年三月卒)	15
夢十題	飛木伸也 (昭三九年三月卒)	16
いわずもがなの争	寺江剛子 (" ")	22
雑感	田村雅英 (" ")	25
扇を可愛がる	堀田正臣	26
東京〇巴会について	樋口正瑚 (前東京〇巴会幹事)	29
東京〇巴会幹事仰せつかるの分	森本梯次 (現 " ")	30
馬具報告	山村 勝 (昭三九年慶馬具主任)	32
続不帰の夢節	三浦 清一郎 (昭三九年三月卒)	34

国民体育大会に出場して

楠田光夫

昨秋山口県下で開催された第十八回国民体育大会に出場すると云う事を聞いた勤務先の連中は異句同音に「興奮」として行くのですか？、御苦労さんですぞ」と正に物好きだと云わんばかりの顔面を弄したものでした。それに対して私は胸を張つて「冗談ではなひ代表選手として出場するのだ」とえらく威張つた様子を返したものの、帰つてきてとれらの人が「どうでした？昨日新聞を見ていまして名前が出ていなくて」と皮肉まじりに云われるいさ、かじ、耳を打つ物好きだったかまじと云う後悔に似た煩苛をひひと味わひさした。従つて老気は黙つて消え滅と思ひました。が部員を出すから何か台詞も書けと機会や身へられさしたので敢へてこの文をしたら、ぬれかけです。結果を申し上げますと自馬中障腿では、一落下の好成績をこした者が何れも照渡しの馬が十数頭も居たのは問題とわたりさした。総合競技では才一次予選に何と三十二頭もの照渡点者が出、幸い私も予選は通過しましたが、馬場馬術など、云うがれさし種目にはコチン／＼に上つてしまひ馳歩退場なのに、あゝやつと笑つた」と云うあざりの

悪心感の予識を益々こゝと退歩を退場すると云う始末、次の海外騎乗では、制限時間内ではたつたけれど五分を超過したものは失格者を除いて私ともう一人と云う天福れな愛馬精神を發揮し、最後の障腿乗越は正に体力の限界に來て鞍の上で踊りつぱさしたの端に才丑障腿では三回目をやつと飛越しすると云う体たたくて失格者を除く最下位の名譽を拒つたわけです。大会終了後静かに反省をこぼすと私の騎乗する洋馬場には殆んど乗つた事がなく大会前に毎朝競馬場を練習したものの都合が悪くておかく、洋馬場には乗れず、さりとて団体に出来るのた打つと云つて洋馬場の他人の騎乗を禁止する様を心臓も持ち合はず、云わば本場に練習不充分のさゝに出場した結果である云わなければなりません。私はこみ／＼この極百餘度に出場した事は自馬乗技の修練上全く申し訳けなかつたと考えて居ります。もしも洋馬場を充分乗りこはし万金の準備の下に出場していたら願けたとしてもあの極々自分自身及びめを思ひはこむかつたでござらう。それにしても大会出場十日間の、日頃のわづらわしい仕事をこなれ、食事をすする馬に乘ること、採ることのみに徹した生活は家に乘附らしむ暇い出とまりさした。この点私を洋馬場りとしていたわつて下さりつらい仕事を遅んで引受け下さつた同行の皆さんに心から御礼を申し上げます。

競技に敗れて老衰をして國体の運籌を離らせしや
けるがら國体こそは地方にあつてそれらの環境の
中で精進して起る無名の選手の場とむてもらひ、半取
業困ると云ふ言葉は適當をなしてしてもあまりに起る
れ過ぎたる名選手は席をゆづつてもらひたいものであ
る。こゝろする事が本當の意味でのアマチュア精神にの
つた國体と云へると思ひます。

スポーツマンたれ

黒田正臣

スポーツマンの死びは、人間がその持つてゐる力の全て
を出し尽くし、軽じ目まいを感じざるやうな疲労の中で、
たつた今自分のやりたことに對し軽い満足感をもつて
ふり返つてゐる時に感じられる。

そしてそれは、その結果が自分に満足の行く場合に
最高の死びとなる。すむわつ勝つた時が最高の死びが
得られる時であり、又勝つてゐても、自分の力を全て
傾けたのやとらゝ満足感があれば、それがスポーツの
死びである。

スポーツでは、人間がその持つてゐる力の全てを發揮す

れば、その技術に必じ比較的單純に結果に影響する。
複雑な人間社会の因果の關係は、それ程うまくいかな
い。
しかし、スポーツをやるのは、社会からの逃避のた
めではなく、社会の一益火劫の法則を体験しようとな
ることである。

スポーツマンは、いかなる時にも自分の調子を最高
に持つて行けるやうに心掛けてゐる必要がある。

試合においては、それは技術以外の要素が勝敗を決
めることがある。勝負と云ふのは、それら全ての要素
が統合されて、形に現れたものである。スポーツマン
はそれらのほんの小さな要素もあつてはかたしてはなら
ない。

従つてスポーツマンは、日常の生活において自分自
身をコントロールする必要がある。少くとも、コント
ロールしようと努力すべきである。それの感情も肉体
もコントロールされる人間は、理想像で、現家
にはいかなるものである。しかしスポーツマンは、技を磨
くことと共に、その最高の姿を目標に努力すべきであ
る。

スポーツでは一つの技術をマスターし、その技術と

体力の鍛錬の度を試すために、あるいは、そのことに
より更に高度の技術を身につけるために、試合を行う。

運動部としては、個人競技、体力を鍛錬すると共に
チームとして競うことを目標として努力する。チ
ームとして競うためには種々の要素がある。

チームのメンバーの技術がすぐれ、フアイトが必
ずつてのこと然り。しかもつとも大切なこと、
チームを支えている全体の、一つの目的に向つて団結
して力むのである。

運動部の知と云ふこと。

それは上級生が作りだして下さるものでは無い。一
つの目標に向つて歩いている時、ふと隣りの人間が自分
と同じものに向つて懸命に歩いている姿にうたれ、又
闘志を燃やす。

味方同士の存在する闘志。それがお互に力を与え、
創造の意欲 さはる。

そして頻りにくころには、自分はおいつのせめに
がんばえられた。と云う感謝の念に変わる。潜在して敬
憤心は、親しさと相互援助の気持に変わり、その時期に
は外部に、共通の敵、目標を感じ、味方同士の裏から
味方となる。誰から強いられて味方になるのではない。

運動部の目的、より強い力、より高い技術、より団

結したチームに向い堅実に努力することにより、必
然的に生れるものであり、それにより力ができた運動部
こそ、優勝することが出来るのである。

運動部では、行動がそのさ、議論であり、見せかけ
の親しさは通用せず、合宿、作業、試合を通じて、よ
り深い人間関係の上に立脚する和が出来るのである。
スポーツマンは、人間へ自分及び他人に対して、限
りない愛着を感じる事は奨められる。従つて運動部員
であれば、自分がチームのレギュラーであること、又
はそれを支える基礎のレコの手石にすぎなくとも、チ
ームの勝利には自分のこととして喜び、又敗北には無
念の涙をかみこめることが出来るはずである。

* * *

大学の馬術部は、馬性の集団にぶつてはならぬ
。どうぶつとしてさつたら、本来の課外活動としての運
動部の意味から遠脱してしまふことになる。

しかし、馬術のより深い興味、より高い技術を備へ、
対外的にも強くなるためには、一学年に数名、少くとも一
人は馬性が存在し、彼等が牽引車とぶつて部の運
転を司る必要があるのである。他のそれ種馬術につ
いてのさつめは考えをしおし大部分の部員は、彼等
に単に追従して行くだけである。大勢的が立場から總
えず監視しつゝ、部全体の方角が、目的とするものに

馬との四年間

小説 武

白けるように、自分のせざるかき口の枚力をすべさであり、そうせざる場合には、自分の部を運動部として後くすることは、あきらめざるべきである。

寺箱連山にまた降る白雪に旭日が輝き、都公の聲が夜明に響き渡り、雷駟の水が小川にそくぐこる、北國の香は漸く訪される。四年前 Now Tokyo として馬に乗つてから、すでに月日は流れ今や進出される身となつた。この四年間、これ迄と部の正史に種々の出来事が相ついで起つたことはあるまい。またに世はあの如く多争の Sturm und Drang の嵐であつた。その最大なものは資金面の争から學生課務の困難、そして農場との関係と部員はもとより、松本、平沢両部長に大役御面倒をおかけし、先輩諸兄姉に御迷惑をお掛けした。三十一年度も企画以来枚掛りで三六年に完成し三七年一月に発行記念会を行つた。また部活動の中心たる自

馬の老練化、及び事故に及び、離厩馬も六頭を教へ、僅か五年前に及つた先輩が厩舎を訪ねられても、新顔たるいなのに大方感懐と感じられることでもさう。事故にまつて北標馬(ミス・トクシマ)を三四年冬に失ひ、北澤馬(オミシラカワ)を事故、老練の故をもち三五年秋に、北オ(オミキンカ)、北春馬(林秋)を三六年秋に、北翠馬(エリガベス)を三八年秋に故障せ、そして数々の優勝を、時に六段飛越を日本馬術界に女王としての座をしのた技部の代表馬北嶺馬(ヨシタカ)も奇る坪波には勝てず、余世を牧場でのんびり終らせたいのが先輩方はもろろん技々の希望でしたが、周囲の争橋はそれもゆるさず、決して離厩を見送るしかすべがなぐ、三八年暮もおじせまつた二年の雪の中、駒々にすぬかれた厩舎を去つていささかた。一方次代をになうべく六頭が入厩をまじした。即ち先輩の富山氏より北涼馬(オミカレース)をいじださき、また松本先生のお世話で日高の実験牧場より三五年秋に北揚馬(フホウ、中半血)、北嶺馬(水堂、マラブ)を三六年初秋におろしていたたき、また部員のアルバイトと先輩諸兄姉の御援助で通厩養馬より三六年冬に北嶺馬(コーセー、中半)、三七年秋北嶺馬(ナグサ、中半)三八年秋(ミス・トヨカエ、軽種)を購入した。札幌団地で購入した北嶺馬(ミス・アップライ

ル。マノシは老練にむりました。が身を健在、製場の朝
清島と都合八頭のははちも交りず、部は居りますが、
先に書いた通りそのうち大頭迄四、五年の間は交つてこ
まいました。

また、田和一四坪暮り六坪、正に部の正史の大津
空戦の部復活という生みの苦しみをも味わられた才
四代部長太系康次教授が北天選出ととも三七坪三月
松本又兵教授、つより鞍部の大坑導に部長を引継がれ
函館に発せられた。どこに三八坪三月現に才沢通郎
教授に部長を西村雅吾助教授に譲向を、岡田光天先輩
に監督を引継がされた。また三四坪壬空選出戦以辞難
状二坪、三七坪に遂に壬空での優勝を勝ち取りました。
現北北海道学生馬術選手権三七三八坪二連勝、引大戦
三六、三七坪二連勝、その他三七坪北海道団体選手権、
三八坪北海道体育大会馬術競技大会に各々優勝、また
準優勝としたのは三五坪東日本馬術大会（優勝東大）、
三八坪北海道団体戦（競馬場）、三八坪南大戦（、
九大）、学生馬術五座決定戦（、学術院）の各大会で
した。一方女子戦では三五坪南東北大会、三六坪招徠
全日本女子戦、三七坪札幌北大会と優勝しました。と
にかくどの大会でも優勝戦に常に北大の名が有り、ま
た優勝盃での飲んだ酒の味は何處と吞く味わいました
。たまに一ツ残念心、私共このまゝ、追出されるのには不満

足否のば、これらが總て貸与馬の大会であつたことで
す。このうちのいくつかが自馬公の試合であつたらと
心残りです。相つ々馬の入換で、自馬での活躍が陸奥
尚早く、いたしかたありまじ入せましたが、早く調教が
進み自馬でも活躍させる部でありたいと思ひます。出
陣に優勝したのが唯一でありました。急がず、おわて
ず、新馬の調教に勵んで団体、全日本、学生自馬対抗
に活躍させる日を部は去つても待つていきます。特に学
生という階級を身分と馬術部という団体の一員である
我々が目ざす最高の大会は近い将来学生自馬対抗戦で
あらうと、私は存じます。自馬での、しかも団体戦と
いう点、これに勝つた時、その名誉と並びは、案馬心
と部員相互のつながり、また部の発展へと直線的につ
ながるものと想ひます。しかし貸与馬の大会があり、
これに參加すると決まつたが、やはり最大限の練習
をつんで、優勝出来る契機をつけるべきだと想ひます
。おつをあのつつもりで、若しくは大会があるから分
加するのだという気持ちには換へるべきです。とつを分
ければ貸与馬大会を一さしホイホイとして自馬に打込
むべきです。初めからたいした練習もせず、戦つて当
然戦力のない者が、その頃の氣力、技術を大会で最大
限發揮したところ、それがむんにむりまじさう。も

しどの時、假が満足したとしても、それは不ボーツ選
きとした、また入願しても矢張であるとは断言し
ます。又お方の假試練習を充分に修められたという点を
も可成り高であつたのだから。

* * *

選手生活も終り、また進出される日も近く、四年商
の思い出も尽きないさ、さときりもなく、筆を進め
てまじりまじした。良く乗つた北楊、北翔馬のこと。ま
た曰高に、鎌田牧場を訪ねた時見とミラオキ、白優母
の夜、実験牧場の越冬中の牧馬馬達、優勝盃を抱いた
感懐、九州遠征、東京遠征、タンスルーター、映画会、
三十年史発行の際の羽勢河下とじこめられたこと、真
夏の太陽の下での乾燥上げ、台座、農場市場のこと、
今はすべて思い出であり、美化されはじめているのホ
も知れなし。

馬と共に過ごした四年間の青春、善しここの連続
たつてが、結局楽しいことの連続だつた感じがいた
します。

ありがとうございまして。

昭和三年二月十八日送別会前夜記す。

北朝 号調 教日誌

一才二部！

恩田正臣

北朝号も入既以来二年を全過し、既に、新馬とし
ての調教の模様は報告した。こゝでは荒塚馬として初
登場し、感れてから再調教に踏切つた以降の全過を報
告する。

初出場は昭和三年九月七八日。札幌山公園で
行われた北朝遊学会兼団体予選。観台と中階欄に出場
観台では鎌田(セントベル)に次ぎ二位の成績であつ
たが、階欄で失権。中階では正盛光輔と私共乗つたが
二度共ゴールはこたが拒止、落下があり無過失が六頭
もいたのが園外。馬場では沈滞し、運動は非常に正確
であつたが、柔軟性と前進気勢による懸板性において
セントベルに劣つた(審判評)階欄ではスピードを抑
えようとしたり馬頭を上げればなら、馬中で踏切るさう
な状態であつた。初出場ながらタークホースとして期
待されたのに全く恥しい仕才であつた。岩坪徹氏は三
月に大阪より札幌へ転勤して二られたより、札幌乗馬
クラブに籍を置き、ヤマトオルを調教しておられる。

日曜日には必ず北水の馬場を使つて練習し、我々に指導してくれたり、ヤマトオルに来ててくれたりした。自らへ招待してくれたりしてイタリー方式について説き、我々をして自然馬術旋風をおこさしめた。

しかし実際にイタリー方式を調教にとり入れたらどうと決心したのは通大会の惨敗から立ち直ろうとした時なのである。それからしばらくは水靴を穿き長くし、最初は常歩に之靴に支点を求め、衝を前下方にかかせることを教えた。この為頭を下げさせる爲に岩坪衣かの敷えられたらさらに逆鞭を掛けた。不愉快での行進は馬が尻元を注進する爲頭を前下方に下げ、それを続けるうちイタリー方式の根本がある、いわゆる衝を前下方にひくことを覚えていつた。速歩でもこれが出来るようになったら今度は、馬場に入場時に横木を敷かして谷を走の上を不規則に走りかわるるるることもした。衝受が大体出来るようになったら、何れでも蹴り越えた。はんに中のおし物でも絶対逃げたり止りたりせず、障礙物があつたれば必ず蹴り越えろの谷と云ふことを徹底的に教えた。速歩では、鋭い鞭を引き一定のペースの伸張速歩を行い、手綱で次に蹴らば必ず物へ顔を向けさせてやる、自分からそれに向つて行くまでにあつた。先生であつた岩坪氏に速歩ではもう充分と云

われたことにあつた。しかし進歩は伸張をひかひかのた。輪乗りをしてはいるときは、頭を下げて衝を引き一定のペースで散歩運動を行うのであるが、障礙に向かうとペースがや、くすれ、頭鞍の位置が少し高くなる。衝にはよく出ているのを逃げたり止りたりすることはないのであるが。

この頃(十月六日)札幌自馬大会へ競馬場、札幌ウ、北水対抗)が行われたが、中障礙は通過失でキングワレーム、ヤマトオルなどを敗つた。大段飛越をも三乳飛(四回目一五〇では才三障礙を越下)して勝つた。

この試合でイタリー方式をとり入れたことの成功を立証した。

次の試合は小倉競馬場で行われた学生自馬大会であるが、札幌大会の後すぐ上京し、マバロン大会に出たりして二週間ばかり、鎌田光華のセントベルに劣感してあり、再び北水に心をもちたのは山口國体の会場である。学生自馬で二週間と云うときであつたが、彼女は札幌からの貨車旅行中にお狐邪を召して氣汁をたらし、ブツソリやせしめられた。しかし熱のためるんだその眼の懐かたこと。再び彼女の生活が好つた。

学生自馬では総合馬術を行つたため久しぶりに水靴をかけ、水靴と水靴の使用は一対一で行つた。全日本大

彼の脚籠の隙には再び殺逆脚籠の最盛の調子をとりもどした。全日本カールドスマツタと大坂飛越にとび入りしきると思つてくらひである。

学生自衛の目前には山口からの輸送を再び妖邪の勢が出たので、鋼管管理に一番気をつかひ、入会にはこの馬のベストコンチイションを臨むことができた。

馬場馬術は国際規定の総合の馬場(8分)。北駅は側点と〇五と七位。競馬場の走路を使用した自競走馬あがりのこの馬は、非常に興奮し盛えに暴るとさざと騎をならし前歩がでさばいくらいであった。その為騎手の扶助に對する注意力をいくぶん失つてしまつた。二脚蹴運動と馳歩運動はもうどうもでさばらずであった。元來この馬は歩様は余りよくないが運動の正確さが取柄であつたが、この失敗をすいぶん受つたと思われる。

野外騎乗は七九種、最初の三山畑がステーキプルケエーヌで増点のある区間。残りの距離は川の中を走り、土手を駆け登り、下り、道路を走り、その後の総合馬術の区間に相当するもの、しかしこの区間は増点なし。

北駅はステーキプルでは心配した通り、首、廻り出し、競走しきるとしたがる。この脚にはこの馬にはイタリ一方式は全究通じなかりだ。走らせるとおいて障礙(高さ一三〇センチ六〇の生垣)の前五〇米からブレーキを

かけ、改めるとおきおし無事七位の高欄を越えオー区間を通過。増点はもらえら分(一五点)を全部頂いた。しかしこの騎乗者は、性能の悪いブレーキで運動せねばならぬかつと馬に、腕がわたくしに硬くなり握力がなくなつてしまつた。前歩区間で腕を休息させれば後の区間は伸長歩でも減点なしでゴールをさるくのいのコースだつたのを察せつた。勿論この区間の固定障礙はとは問題なく、イタリ一方式の奇襲の引合台に満足しむがの乗りだ。オー目はこゝまで終了し五位にあがつた。

余が騎乗はブルツ場の芝生の上で一面を縄を張りめぐらして競走場とした。障礙の程度は大したことはなないが、狭い所とこちやこちやとむらむらべつた。この時も北駅の興奮のしきうはひどかつた。競馬場という条件の他に、凡があり馬場にめぐらせたロープにはつたスポンサーの広告や旗が、パタク、音を立て、ぶるがえるのである。準備運動を終えて替換中、頭を上げつばなし、草を食わけて送付けさつと止して毛髪を付はせるとおきない。停止させるとその端歩をさする始末。しかしそれでも可成りつた。中一障礙がブルの後すぐ迂回鞍。こゝでの制鞍は余りにも余裕がなかつた。馬、無理な回鞍にむき後鞍が芝生ですべつた(これが高欄にとられそのは不可解)。

その後ズビードを全然用せず、短程な回数はかり、鎖を北側にとつて面白くない至路であつた。オハ障樹（ハードラム平形）の（）では前後の透下。オハ障樹の補助を頭頰を下げさせる余裕がなく、一歩さけずに踏み込まず、踏み加れず拒否をとりれた。結局、一拒否一落下一転倒計減点三〇（点数を二倍に計算）。前日さへ五位であつたのが十二位に落ちたことだ。三十六昇馬に入庭してから十二昇馬を越した。その間私がずつと調教を受けもたせてもらつた。三月二十五日の卒業式まで乗り続けるつもりであるが、学生自馬が最後の試合であつた。この試合では順位こそ大したことなく終つたが、一応これで北側の総合馬としての基礎調教は終る時期にきたと考える。騎手がうまければ、学生自馬で馬場を五位以内。総合で三位以内の入賞も不可能ではなかつたと考える。今後部の競技馬として大成させて下さるよう後輩諸君にお頼みする。私の後をやつてくれる野田君を始のとする方達に、現在の北側の欠点を述べ、改良してもらいたいと願う。この馬は、大朝調教とイタリー方式という、相矛盾する二つの方式で調教された馬である。そのつもりでせうりについても深い認識を持ち、その各枚点を又々で見つけようとするらしい。

馬場では、二がしが固定せず、ひつぱつて来る人には

類に抵抗がある。手綱は少し長めに持つて来ること。歩様の良い馬ではない。特に收縮姿勢をとられたときは、手綱の控へ以上に推進すること。

馬場では練習中は長しが競技場に入ると必ず又直し、うまくなるまいと突進癖にもなる。このしたう興奮を最少にとどめられるかどか、競技場でのテウニツクは各自練習より学びとること。貸つて貸与馬乗技用の馬ではない。イタリー方式にかえてから、逃癖、拒否はほとんどなくなつたが、大段飛越のぶろが驚愕、又はゴールをまわる場合でも助走が狭い場合ズビードが出て体が伸びると、一岡歩踏のぬきぎを止るこゝがある。この場合、右へ肩を捻すようにして逃げる気配を示す。その時左手綱で頭をひき、右き綱で肩を打つてやるようになり、更に脚の推進を一段と強くすると、止りそうなりながらも飛ぶ。特に入段ではこの馬に有利な種目と思われるが、高くすると一刹那に逃げたがる気配を示す。随伴がうまう、着地してからすぐ脚が使えるようではないと願理。ズビードに屈服化されて脚の推進を忘れないこと。術を外しては絶対いけない。

* * *

卒業が一学生が調教したために、この馬のこともるが

を全てひき出しそやることはさきかつた。今後の通
着にこれをお願ひしませう。北風が永く永く、北大馬術
部の大切なる所として可愛がられることを祈つてゐる。
おやりなさいにも大役を果すことができた爲には、多
くの方便の役目と御禮遣をたまわりました。將に色々
適切なる所、御指導を受けました岩井藤次郎氏、川
口宏一氏、荒木雄豪氏、大木正己氏、高橋留次郎氏、
又平沢部長を初めとする岡田、斎藤、鎌田、正富、又
堀、千葉各諸先輩に深く感謝いたしませう。

一九六四・二・十八

北 坂 言 調 教 の 記

八木正己

はじめに

北坂調教、田村三と坪一二月十九日に入阪し、小生
が、生慮氣にもその調教責任を担つたことになつた。そ
の日は、乗込オリンピオン近代五種用馬の買い上げが

あつて、全く色柄して手に入れた。早速、騎乗して試
みたが、思つていた程騎乗は強くないが、動きがよそも良
い、音に對しては徹底的に反抗し、哨音でも停止が難
しく、先づ腹股をぬかれた。

調教は先づ調馬家より始めだが、これがまた、難題
であつた。右手前は割とうきくやるのだが、左手前に
なるや、途端に停つて動こうともしない、無理に後方
から鞭で感嘆すると、尻を割けて蹴つてくる、しかも
何歳もくり返してゐるうちにうきくやるやうな来た、音聲
に對しても従順になつた。

——オ一の失敗——

どういうわけか、その後は割りと賢気が早く、停止
も必も音をそれほど控えなくとも、速歩で、停止の板
助を与えろと鞭を握ると停止する様になり、騎乗中
中全一三川位も覚えて来た。勿論ずつと水鞠で乗つ
たが。

その後前肢後脚も教えて、二月に入つて肩を内へを
向々入れるやうにした。後退は、各々込んで采で姿勢
は悪い。この間、一月に入つてより、週二、三度五、
六の瀬の障礙通過を家通してした。駄歩の飛進、停止
も行つた。そして、二月九日頃の事ですが、肩を内へ
をやつていて、それまで右内方での、肩を内へ、かう
さく行かざつたので、馬場の欄に沿つてやらせてい

た。仰ぐ彼をなむと逃げようとするので、拳を握ると直ぐ後退を便つて飛び上るやうにして逃げる。それと、三度樹のコンクリート柱に右ヒザをぶつけた、それは必強く当たつたやうに感じなかつたので気がつかずなかつたが、翌日騎乗し終つて、ヒザが一吋も腫れてゐる様子のを大きく見ると、矢張りとうである。腹行もさういので様子を見ることにした、ところが二、三日して腫れがひどくなるのでまたの獣医に見せると、関節炎である。勿論騎乗停止で、ヒザはブローロー湿布を続け、これが才一の失敗である。

——才二の失敗——

三月中旬になつて漸く、獣医の許可が下りたので、また騎乗し始めたが、また腹行が感じられたが、獣医の語では、乗つてゐるうちに良くなるやうといふことである。

一ヶ月も休んでしまつたので、また最初からやり直すつもりで騎乗を開始した。馬体の動きも良く、割合に従順に扶助に反応し、障礙通過も落着いていて良い。それを今までもどうだが、鈍いとも言える落着きやうには弱つた。どうしてゐるうちに四月一六日の入学式の目がやつて来た。都の眞依パレードである。北野も像が来つて予もいたが、雲が降つてうらたつてしまつていた

めかコンクリートの上で右前肢を滑らせて馬籠じた。その時、左肩と左ヒザを打ち、一寸あわてたが、腹行もしていいので、とりあえず馬房に帰じた。ところが、翌朝行つてみると、左肩から、左ヒザ下にかけては広くムクんでゐるので驚いて獣医に連れていつたわけですが、單なる打撲なので冷湿布すれば良いとのこと、少し気が楽になつた。だがまた騎乗は取り止めで湿布のくり返しが始つた。五月中旬になつて、少々腹行は感じられたが、獣医も乗つて良いといふので騎乗を開始した。

——才三の失敗——

六月七、八日に東北北海道学生馬術大会があり、北野も馬匹数が足りなかつたのでやむをなく使用することにした。それで練習にも使用し、障礙の順教を急いだ。高さは一米以下だったが、いんち障礙でも横割を向つて行つた。飛越体勢はさだであつたが、大会のため台座も終りに近づいて、最後の二日間だけ大会の全路に含まれる障礙の飛越をやつてみた。初日は新馬らしい飛び方ではあつたが、喜んで飛んだ(高さ一米二〇、中一米二〇、中一米二〇の三線と、高さ一米一〇、中一米の平行)。だが三日目、即ち台座最後の日、この平行オクサーで、踏切りが近過ぎた上に、前肢が充分上らずバーを引つかけ、そのさ、前方へ右肩から突っ込んで

しまつた。僕はあちこち引つかき傷を受けたが、馬の
方は大丈夫らしいから。その後も以前と変わったところ
は無いけれども、たまたまの事故以前からであるが、
腹行は、少々感じられた。

——オロの攻撃——

この後、平常の練習にも馬匹が足りなかつたので便
用し、馬場馬術的調教は全くと云つて良い程やらず、
障礙調教も満足には出来なかつた。少々腹行があつ
たので、使用程度を控えていたため。だが七月に入つ
て合宿が始まる。他の馬と訓練に使用せざるを得な
くなつた。八月中旬になつて道大会が近づくと尚さら
である。乗り過ぎると腹行が飛くなるのが感じられる
ようになってたのはこの頃からである。道大会が終つて
悪い切つて、障礙飛越における踏切りの安定を計つ
て、固足障礙でスピードを上げた連歩通過（飛越）を
やつて来たところ、一〇日同程も続ける（勿論毎日
ではないが）、腹行は更に悪くなつた。さき乗りも満
足にいかなしい（これは五月からついでにいたのだから）
更に悪くなつたので、さき全日本学生自馬大会に連
れてゆくことになつていたので、獣医学部の坂井教授
に見て貰つたところ、左ヒザの肉傷をかきし癒したた
めに、右肩に無理がきこ、筋肉が落ち、右前肢が前方
にあるし脚がなくなつていふところとした。確か

にこれは我々も気づいていたことではしたが、これでは
つぎにたわけです。所ヒカはもう完全に良くなつて
いるということでした。この病の故障を完全に治すに
は最低三ヶ月は必要だといふので勿論遠征は取りやめ
ました。

——とれから——

というわけで一〇月初旬以降乗するの馬やめて、
一踏は馬場にしよるなと云つておひさし。僕とし
ても非常な責任を感じ悩んだのですが、十一月に入つ
て学生王座も近づいたのだから、十一月二〇日頃には
離れてじた馬場に、又しばらく行つてみると、北球も
受わけていさしたか、何んど見たところ腹行をことい
るようには見えなかつた。翌日実験に乗つてみると全く
腹行は感じられませんでした。その時はまだ信用でき
ませんでしたが、今乗場を覗いては二月になつても
腹行はしなないのでから完全に治つたといえるのでし
ょう。ほんどおきらめていたのですが、ほつと安心す
るとスにまた北球の調教責任を預けられるおそれな
かり、現在騎乗しては次才です。もし北球の腹行が
治つていなければ退部してはたせよう。

現在では、週三回程不勤を付けているすが、連歩
での停止、後退、反対姿勢の前肢後回、常歩、連歩
の「前区内へ」も、割りと軽し歩様でやるようになって

散歩運動も除々に良くなつて来たります。障礙飛越は、平歩オウサー(筒とれ)の種、巾一米三の種位)の踏込切りの安定に努めておりましたが、適度な踏込切りをする場合が多くなつて来たります。とにかく、責任をもつて調教に励むつもりです。以上上げた数々の災案を多老にして、また諸方面からの知識を充分吸収して、二度と事故を起さぬ様に気を付け、今後の部員に懐きおぼしき方に気を付ける所存です。

おわりに

以上の様な災案は、取つてお湯が熱かつたのもおりました。暑気の現れと云いますか、煙気が鬼結果をもたらしたとも云えまじやう。如何に馬が健康を永く保つても煙氣を起してはいけないことは解つていておつたやうにしてゐるといふことは良くあることだと思ひます。今後、新編調教に当られる方々の参考にもおぼしきおぼしきと存じます。

一九六四・二・二八

北野馬

三七年一月二九日入廄

由名「櫻」(ナクナシ)、雌、明一〇オ、生産地は北海道三石郡三石町でウラグレットとの中半血でウラグ血量七、〇三%である。毛色は鹿子、面小白、黒星が体高一六三程、管脚一丸程でスラリとした体躯を持つ

が脚から尻にかけて少々絞じり。ギ甲はよく発達していて、首も適度に長いが形はそれほどよくない。

性根は素直で仲が良いが、非常に悪い癖を持つている。それは先づ馬房の板をクルこと、最近はおきりやうていおきりたが、それを鞍部に裂傷を受けたりとがある。次は、他馬をクルこと、被馬すると、他馬にわざわざ近寄つていつて、至近距離からの正確に減多けりをするところがある。それで他馬の責任者から度々文句を云われるが、本馬は馬身果敢である。更に悪いことに、不注意に近寄くと、人間に対しては、歯をむき出したり、ケツタリする。しかし、馬装してはさうと非常におとなしく素直である。

この馬は道管競馬で走つていた馬ですが、馬丁に聞いたら二回にさると、馬房をケツて仕方がないので(騒いでいた馬がおとなしくなつてしまふほど)おつたさうですが、橋にバラ線を経いて尻をたいたたりというひどいことをしたので癖が悪くなつたのだらうというところ。素直だがとんでもない悪癖をもち、何かを痛じているさうですが事實です。要するに、来られていた馬はおとなしくしてはいて、下りた時は勝手なことをするといふさういふことを覚えてはいるのかも知れません。

部員の皆さんへ

鎌田 正人

新年おめでとう御座ります

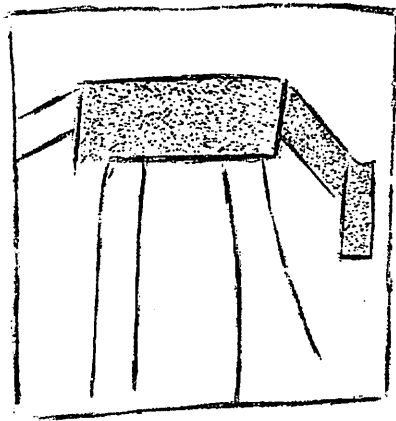
本年も又新しい成果を目指して競に精進して居る事と存じます。昨年末の壬座決定戦優勝でした。皆さんであの勝戦を反論される機会はあると思いますが、学習院との戦の又はテレビで観戦出来ましたので、今後の発展のために一言技術的な面を御意見を申し上げます。

先ず、オ一級の鹿野馬入等はおそろく、上つていかなく見たとか、自信過剰とか、の精神的技术以外のものであつたらうと推察致します。しかし昔から学習院との戦はオ一級に負けしであつたと私は思いません。何故ならばテレビで見たとかは、選手諸君は、落下障礙の尊重という事と射心と無射心である様に思われるからで。現在の北大馬術部の訓練の状況を見ても、馬の状況を観ても、止まらずに飛越させるというところがオ一の目的、目標であつてそれ以外とは何も無い様に思われるからで。勿論現状ではそれを見方ない事ですけれど良いと思つて。ですから若し对学习院との試合でももつと悪い馬(不従順な馬)が多ければ

結果はどうなつたか分りません。けれども馬術はそれだけでは良い結果は得られせん。オ一級の馬脚に次第に負負々前進させる(拒排させない)事と同様に、之の前進を規制する事も必要です。そして何より馬と選手等は、障礙飛越に当つて馬に対して高度の要求を与えて置かねばなりません。その事は脚の推進と拳の微妙な連繋によつて生ずる事を訓練によつて等はおぼせらぬと思ひます。緊張を与えるという事は馬を完全に手脚の中に入れるという事も一りです。又近頃流行のモンテヘインデルガンシオンもその高度に進歩したものと思われず。それ程までではなくとも馬を障礙に対して緊張した状態にするという事が落下を防ぐことである事を良く知つていたと云ふと思ひます。勿論馬それだけの個性によつて種々の表現の相違はあります。馬術とは根本原則が種々の形になつて現れてますから、それを形にとらわれず(さざわされて)原則を忘れることがあつてはならぬと思ひます。私も度々緊張せずに失敗した事があります。それは落下にしても拒否にしても馬の現状に相応した各種の緊張が必要を事を数多く苦し至験を通じ之を感じて居ります。そして、それがおぼせにむづかしいかも知つていさす。馬術部の現状として競技用の高度の技術の他にも数多く知らねばならぬ、研究せねばならぬ基礎的なものが

ある事でもしよう。やはりそれがオ一ですが、時下は一歩進めと幾度の高次のものを研究する事が進歩的馬術部としての使命でもあり、個人々々を将来に向つて永く準備入たらしめる一つの要素に於ける事を確信致しませう。

論旨が統一していませんが、私の思う所を御理解願つて今後の参考になつたら幸甚と思ひます。



夢十題

荒木伸也

一、愛

彼と彼女は林の中を歩いていつた。道々彼女は彼に對する愛を拙い言葉で一心に告白した。彼と彼女の語る聲で彼は始めて見た時からの、如何に深く彼を愛したか否か。

彼はささい氣持で一杯におつた。彼女の愛に心くいることは出来ず、それは彼女に自分の妻たるべき教育が親育が熟いから、と彼は思つた。妻を切らば才たけて、という信念に背くことは出来ず、しかし彼女の肉体は何といつても戀力を思つた。

彼は若し望むから、易々と彼女の愛と肉体を身に入れることが出来たのだつた。けれど一歩の純心が、かくも清い愛に對してあえて償わりを行わしめなかつた。彼は羞しい心境を、いや私には年齒の別の女性がいるからと言つて逃れようとした。しかしその言葉は胸の奥でつかえて出てこなかつた。突然、彼女はさつと身をひるがえして駆け出すと断崖の上から身を蹴らせた。彼は走り寄り崖のふちの立木につかまつて下を見

を。二十米程下のコンクリートの車道の縁に、白いマシウスを血で染めて彼々が「く」の字型になつて横たわつていた。その顔は見えなかつたが、今や承使のまうを安らかたが彼々の全身からあふれ出ているまうに彼には思えた。その血の色は黒赤であり、強く彼の胸をうった。

ふと、黒の小型車が一台、彼々の死体から程遠からぬところに止つており、運転席の窓から一人の男の顔がのぞいて死体と彼の方をくり返しくり返し見ているのがわかつた。その時にあつて、彼は、長年の信念がある、教育とか才能をオーストリアの人生観の一部が音をたて、崩れてゆくのを感じた。

(十一月二十二日、早朝の夢)

(東支那海)

二 青 春

不動の姿勢でワツチ(風張リ)に立つてゐると、あれやこれやと考えることも多い。童子ちやん、バビちやん、火の国のタツちやん、初代しやん、いやそのせはばかりなること、驚きなり。この考えは人生の至驗と共に移るものである。青春の頃は承使の揮かこい夢、老いてからは過去の追憶。

(十一月二十八日ホルネツ海)

三、ペペルモ

火の国のタツちやんが現れ、二、三の言葉を交わした。彼は動物園の原野をたいたところをキリンやカウヨウを飼つていた。「十マイルに二、三頭のかまウ(その姿はキリンにさく似ていた)が飼育されてゐる」と誰か説明した。

彼はその時、タイの広い広い青空と、そこを渡る雲か爪や白い雲のことを一生懸命頭に描いていた。その時、十五分前。(ワツチ交代の)が来た。

(十二月五日、シマム港)

四、大 学 生

明け方の夢はおもしろかつた。

彼はある国の物売りにあつた。金持ちのアメリカ人の若い夫婦が来ると、五ドル相場のもの五ドルで売らうとした。夫は妻のためにその小さな赤いガラスの指輪を買い、誇らし気に妻の指にはめた。

その夢は、若くしてされたかつた。彼は下を英語で質問した。「あなたの方では先生のさうですか、大先生でいらつたじやいませんか?」すると、「いいえ、ハイスクールの先生です。私は大先生です。」と彼女の答へた。大先生か、という言葉を聞くと、又々として「僕も大先生です。」と胸を打つて叫んだ。そこで目が醒めた。

(十二月十四日、インド洋)

五、溪

奇妙な夢だつた。僕は承興の異國にいた。それは夕
イあたりの中だつたかも知れない。湖の河が流
れていて、河口の船は之の流れを溯つた。河岸に粗糸
ざ木の家が並んでいて、屋根と柱だけで、製材所か何
かのさうだつた。僕はそのうちの或る一軒に後子とし
ておわかれ、そこで二年間住くことになつて、い。そ
の家の人と僕さんと子供が家の中に居るのがわかり、
人のよさそうが森のふとつちよの主人の顔まで僕には
ありありと見えだ。僕は彼の家にどいざつて、二年の
間この地域の開発の爲に効果的な仕事をする事にな
つていた。

僕は狭い道を走る自動車(バス)の席に腰を下ろし
ていた。断崖に面した危かしい道だつたが運転者の(ハ
西奴の)〇分誰れか、彼の爲に懸命に、うさく運転し
てくれた。僕の空席の横に一人の婦人が座つてゐた。
それは僕の母だつた。母は着物業で、この承興の山奥
まで僕に会いに来てくれたのだつた。それが母だと知
つたといふ、涙が出つと溢れた。あゝ、實際あんまりも
甘い涙もあるうか。

母の愛が僕をかたじけなく、醒めても心の奥を動かす、かく
ぬわしてゐた。(十二月十八日 インド洋)

六、結婚

僕は或る所にいた。それは故郷の隈在小学校にさく
似ていた。入々は皆に長けて感しく、僕はそれ等の人
々にさつて慰めとれ嘲けられたさうだつた。

或る一匹の動物がその組合に出現し、人々の恐怖と
なつた。それは熊のさうにずんぐりしており魂の通じ
ぎ人面を肖するものであつた。奇妙なことに、僕はそ
の動物とすぐ仲良くなつた。人々の恐怖の的も、僕に
はささげ熊の顔をしたかわいい仲間であつた。それが
わ僕は之の熊のちう一人の仲間であるや性を知つた。

彼女はさされもなかつた。僕は彼女の純粋心に
魅かれて彼女と結婚することにした。家へ連れ戻さ
——(そのとき別の動物と別れるのを彼女も動物も決
に悲しんだが)父と母に「Pさんは今日から家に長く
居る。僕と結婚することになるでしよう」と言つた。
そして家業のことについて、兄がそれ(商業)を継ぐ
だらう、と言つた。そしてその理由で長々と述べた。
兄は人の心を讀むこと、指図することの才能が僕
より上だ、と。そのうちに目が醒めた。

(十二月二十九日 インド洋)

七、北 編

北編に乗つて、僕は難しい障礙の多く置かれたく

おくとした隘路をびんと駆けつけた。北嶺は氣
指さく飛越した。そのうち障礙は次々となり路は更に
狭くなり、北嶺にもや、無理が出てきたことを感じた。
しかし北嶺は進み、僕も亦その隘路を突破せねばなら
ぬと思つた。

(昭三九年元旦 インド洋)

八 日本

僕はテストパイロットであつた。新型のジェット機
が僕の目の前で、並みいる技術者や高層の洋目のうち
に、鋭い噴射をなしつつ、バツと飛びたら、視界内の山
いドームの円空を自由自在に軽々と飛びまわつた。そ
の機が着陸すると、二機にはいよいよ僕が乗込んだ
。すばらしい鋭角の翼を持つた機體だつた。ゴォッ！
という噴射音がした。次の瞬間はもう空中高く舞い上
がつていた。僕は機體をさしつかり握つて、限られた
あまり広くもろい空の中を精一杯飛びまわつた。空中
に円いドームのさうなものが見え、その外へは出る
ことが出来なかつた。それに何つて動じなく突進し、
精一杯かじを切るよ機體が激しくぶるぶると震え、卒
うじてその壁の一步を前で反駁するのたつた。(機體は
兎に目をどうにうまうまかきまのたつと心の中で思
ひつゝ、ふと見ると、機の胴体の下のネジが緩んでが
ちやがちやしてゐる。急いで手を締めたら又ゆるんだ。

これは危い、と思ひ、急ぎ急ぎ着陸。テスト飛行は終
つた。

それから更に事は続いた。

僕はある成金者のさうな一國と共に居た。彼等は水
産野の大立者だつた。そしてあれやこれやと商業者
を批判して言うには「メは太平洋國へ魚を網のている
云々……」

そのとき僕は彼等と共にいて、不思議なことに依然
としてテストパイロットであり、彼等の被雇用者であ
つた。そして内心、彼等に安心月給で使われているの
に不満だつた。そしてもつと安心不仕の漁夫たちが
不平を言わす辛い労働にじつと耐えているのに疑問を
感じていた。彼等漁夫はどのうら革命を起すべきであ
る、などと思つた。

突然、お傳ら方の面談の議論のまつれから喧嘩が起
り、社長殿が小学生か何かのさうなつかひ合ひを始め
た。秘書だつた男が一方の社長に加勢して、不利と
見るやちかたやピストルをとり出して勝ちかゝつてい
る社長に近づけた。(とここでオット。場面は一変す
る)

僕は上高地に似たオマンブ村の中を歩いた。
そこは米軍のオマンブだつた。日本は戦争に覆れ、米
軍は日本に進駐したのだつた。オマンブには女がいた。

女の親らしい母老いた老夫婦が女の縁ぎにぶりどこに
 醫食していた。そして多くの元氣にとびざわる子供た
 ちがいた。その子供たちはかざり糞尿で、遊びの儀も
 一般の日本の子供のものより非常に野蠻なことが多か
 った。小島をいじめ殺したり、弱い子を喰ひ子がいじ
 めて、水入が尺サド納む満足に奇声を上げて喜んでい
 た。老入たるは——かつて忠君愛國の至誠に燃え、
 又、武士道につけてもいささか誇んだであらうかの石
 三曰本人は、それを観ても何とも言わなかつた、かつ
 ては、どういふ時に本人は必ず弱く着いじめ、動物處
 分の非を正しく子供に諭したものだ。それが言われな
 かつたのは、彼等老入達が、自分らの日々の糧を頼ら
 ている米軍に遠慮してゐた。今や、日本は米軍に
 従属したのだ。その魂に於ても……。
 こゝで初夢は終つた。爽快、且つ暗示的であつた。

(一月二日 インド洋)

北 キリマンジマロ

美しく茂蕨を植帯が六、八(一ハリーニオ時)のワッ
 ケ申續く。面には、赤い雲のさゞ波と青空の深い層か
 お淵の夕焼け……。
 ワッケを続けながら、キリマンジマロの雲を、どう
 したにか思いつづけていた。いつかせらぎ登らう。

アフリカ!

(一月六日 インド洋)

十、ミンガポールの乗馬クラブ
 我々の船はミンガポールにはいつた。そこには大英
 帝国のローマルネイビーの艦船がずらりと碇泊してい
 た。巨砲を運んで家に望またるものだつた。我々は上
 陸した。

未開クラブがいくつもあつた。僕は、二、三の板と
 或る中国人に案内されてその一つに行つた。広び芝生
 の四角さゴートの中で馬を馳り、自らへ行つたり来た
 りしていた。英國人だつた。それいざやの子もいそ
 僕等はどのおもしろいかームのさうぶ毛のに見えれ、
 目つ乗馬の術に熱心に見入つた。僕は乗りたじ氣持で
 うずろをしてしたが、どうどう、(盛の)「食事ノ」
 に起されてしまつた。

(一月二十四日 太平洋)



こゝに書いた「夢十題」は、昨年の十一月十一日か
 ら今年の二月六日まで、水産学部練習船おじさろ丸(一
 千五百十トン)で函館を出航しバンコック、ミンガポ
 ール、東部インド洋、ターウインとたはつた約九十日
 間の船内生活で見た夢の数を、その時々に於て思案

にノートしたものです。

吾せどういふことをやめたかと言つと、最初の八巻
Vに題した夢が、僕に非常に強烈な感銘を与えたから
でした。その夢は、彼野田人（或際は七人）の船室に
忍然として裸体の女性が現われる、という全くフラス
トレーションの証明及びその場面から始まりました。
すくなく彼野田人はその一人の女性をめぐつて醜い争
いを演じ結局、皆の承認の下に彼は彼女を得る、とい
う前半です。その、彼。が僕の分身であつたことは疑
いもありません。又後半のヒロインでもあるその女性
は僕が全く知つた普通の市井の女であつたのです。
夢の中の睡りたとき、彼女の流した血の色が頭に二び
りついでなかなかな離れさせました。その痕は「愛
し」というこの世で最も愛するものを象徴してゐるさうに
思へました。僕は寝えるほど感動して、ベッドを抜け
出すと一氣に書きました。これが直接の動機でした。
都会の騒音が対人関係からくる多くの雑音に煩わねと
れることなく、完全に己自身と対決する海洋に於て、
僕は最も澄きされた心の状態を感じ、そこを見る夢に
或る傾倒性があることを感じました。

このさうにしノートに書きつけた夢はおよそ十五に
なりました。これを愛つて心理学的に解析していつた
らおもしろい結果が出るかも知れませんが。例えど八

学生の中の物売りの部分などは、パンコックやシン
カポールで高く売りのけられぬいさるに常に氣を配つ
ていたことに依りきつて、僕も大学生です！とい
うくたりは、タイで国立大学を訪問して、大学への夢
れ高い彼女を前にして日本の大学生の給料を待つこと
二週間も彼等才敷人とわたり合つたこと、夢への再現
に他なりません。八編のVにのいては、僕は心の美し
ひ人と結婚するだろう、といふことまで、書きことに
口にする女性に誰であつたかは忘れてしまひました。が、
もし僕がその言葉に背くさうなことがあつたら、それは
僕の心がおしよるまゝ決て海に身を投じると決意さ
すくなつた時です。八編のVにのいては、入部当直ま
り親に入った彼女の、巨き三角形の口の上を少くも亦
にらぬのさうな怒いを感したあの表情を今も忘れろこ
とは出来ませんが、もはや此世にない彼女の魂が、何
千層もの海原を駆け抜け抜けてインド洋の彼方の祝日に現わ
れたのではありませんか。

以上、とりとめもなく。夢々を書きました。しかし
彼野田が永遠のものに絶対的なものに憧れるのは、人生も
亦ひと時の夢であるからかも知れませんが。馬術部を通
じた四年間を通じて僕が得た最大のものは、生への服
りかゝ愛着と人間性の肯定でした。ペンを置くに夢の

て後後と、函館からひさいと種を訊してはいつも暗き
るこよほかりして迷途を分けた僕を、常に暖かく迎え
てくれ太郎の顔が、死闘場次に深く感謝しなす。例え
彼等は如何に激しくとも、我々は生涯等を笑ひたくな
いものである。

北野と、駆けろ

秋を、二の黄色い楡の葉の秋を

青い青い大空の眼にて

夜明けの時

(三浦清一郎)

いわずもがな のこと

寺江則子

「あゝ、私がこぶなくいとおしんだ馬術部では、
こゝと一点の足跡も残さずに黙つて去つて行きたいが
あじと残像する争ひをせりである。一点の足跡即ち部報
への投稿の事だと言つたら、何を大げさだと笑われる
かも知れぬ。こんな一文がある。

「書けることばさういことである。しかし書けない事
必ずしも悪い事ではない。書けない時に書くよりも
—— 本心に書かずにはいられない争ひのこゝろに書き散
らすよりも、書かない方がよい争ひである」(三浦清一郎
記より)

書ける事、書かずにはいられない争ひが否か否か
争ひを桶にとろろとするのは、自分の股から出るきい
涙の自分をさげろ出さずのは嫌、傷つけられるのは嫌、
といういたつてエゴイストな奴のポーズでもあるらじ
い。そしてまた、この部ある限り絶りつがれ言いつが
れていくであらう輝きを戦績に色をつらねる争ひもどく
貴族の感涙にむせんだ勝負への執念から勝利への欲
に身をゆだねる争ひもなく、活字生肉部員として選して
きたもののささやかな悲哀の二もつたレジスタンスで
もあるらじい。人の愚痴をいふも面白くもない
争ひ、そして私の愚痴をいふも面白くない一つの運
命として語れる程の技術もむく、きた全てありのまゝ、
に淡々と語れるさうな耳の流れの向うにあり、人の
耳輪の広がりの音が遠く得る境は、程遠い。永然と
遠く張りたからだ。と自己肯定感をもある。北大馬術
部員であつた争ひは、私一人のもの、誰にも見せたい松
原の玉手箱、一入ばつちの私の心のさりとら、そん
な風にしておきたかつたのかをいれぬ。秋を、おれ

ある。

* * *

「おぼさん」の女の親分、男子諸兄がうら若き娘であるのも、私の叔に争つてくれた時名である。こう時ぞれた事を思ひ出す時、私は自分部の中に居た事を感ずる。新しい角帽をかぶりエリート意識で金ピカに輝く顔をばり掲げ、そしている希望なる男子諸兄を馬場で遠慮会釈なく大勢でぶちつけて顔色なくさしめたやぶある私の癖もちらちら見せ、嫌な奴との横溝の口で口であつたろう。それにもか、わがが親の表現でもあつたらう事を厚かましくながら感じてもいた。心否ごやわさと何ともいへぬ悲しさと共に。

「おぼさん」は中々強引で横柄たつたようだ。この最後の杖にもまたその横柄を押し出すの分と、鼻つきになりたくないなあと思ひながら、こうして書きだした以上今去つていく卒業生のただ一人の女子部員である立場から、口いっておかせられればとも、その私の「おぼさん」のおおせつかいさが顔を出す。

女子部員がイコツト、いつの時にも誰かの口からか洩れる言葉であるらしい。人依てにさかされ、個性よく思ひながら、部員として傍観者の立ち場を堅持し、私は私のやり方でやるのとは、か、い、ん、ま、の、中、途、半端たつた私には、女子部員云々の言下対して有難き言

わせば行動的が力もなく、さしてまくしたてる器用もなし。女子部員は手前勝手な御都合主義で男子部員に甘えすぎるというのがその非難の的である。一つ一つの骨身にこたえる。一つ敗戦の中で枕を並べ、男子部員と共に一つ力々の飯を食べて台福し、連征の緊張と開放感を共に味わい笑ひくずれ合う楽しい一時を共にし、一夜を語りあかした事もあつた私の大事さ、大好きの後輩の女子部員達が、自己反省とそして人依にさ

二えるその非難に耐えられなくなつて、退部したい、退部しおければいいか、いんではおいかじりと言ひ出す。相談を受ける時、「こたけの話だけ、少しづつうろつくやろうさ。」と、飛ツリ飛ツリ語り合う。女子部員は数少いだけにさとり易いが、さとり過ぎると女子部を恨むさせようなんて嫉妬つてもこの少人数では、部活動が全然ささなくなつてしまつたらう。かといつて男子部員並に部活動をせよといつても、何々人の考え、性格の差もある事だが、男子と女子の体的な差と周囲に対する精神的なもののハンデイは、つくづくどうしようもない。今更女子である事を恨み

に思つても詮方がい事。でも部活動を通してさかれば、何れにせよものがある。学生という身である故の純粋な生の人間のぶつかり合い、利害を越えた若者の意志の、考えの火花のような相剋。勝負への葛藤。そして

て似々人のうつぼけを羨争心を乗り越え皆んなでイ勝
たんかなノトの意故に燃えてゆく遠征という趣づまる
さうなぞ。希望や兵びや勝利という感激。その故一重
の裏にある絶望や羨しぬや敗北という挫折感に打ちの
められてゐる友の弱さを叱咤し激勵し一語に行こうぜ
と肩を組む友情といふ美しいもの。この波の中に身を
ゆたね得るのはこの青春のページである学生時代に
しかかなわぬ事。だからこの波の流れを吸収するに少
し貪欲であつてもいいのぢやないかと思ふ。耳玉を太
くしてやり被ころふ、但し口をすさへはいいない。自
己反省をされてもいいない。そしてあんまり背のびを
しない程度にやれるだけの事はやらなければという談
笑さう一箇大争の、部を愛する心情を失つては駄
目ぬ。こんな争を語り合つてゐると利発なるお方はこ
んが面を口にする。「それぢや、馬術部でなければど
いろ世態性はぢいぢやない？」私は馬が好きだ。人
間よりも一口に言つてしまつては耳並であり多分に
嘘の心情もあるが一面は本当に馬の方が好きだと思ひ
ていた事もある。馬君達との語り合ひの一時は、向より
私の慰めであつたし、又その語り合ひの中であれこれに
個性豊かな馬君達から尊敬されたり争も多し。そんな争
は、まだいつの日か語る機会もあるつ。

* * * * *

しかし、馬術部の甲の女子部員としてのあり方、その
位置についての問題は、解決せぬままにある。私達女
子部員自体がこの問題にもつと積極的に向つては行
きたくない事を痛感してゐる。「勝たなければノ、」と
いう美しくはもたずた酷でもある悲壯感に胸をたぎらさ
がら、学生としての本分であるべき勉強に對して、課
外活動としての部活動を中心とする比喩をたせて両
立させていくべきかの、いつはてるともしれぬ議論の
渦中にあるがらも、年々と変化してゆく馬術部の中
で、ボヤボヤしてゐると女子部員は置きざりにされか
ねない状態だからである。諸才生部員をもつて認めて
いる私には、何らの示唆を与えるすべもななく若くは後輩
に期待するばかりである。

* * * * *

この毅然たる勇姿に恐れをいれたさ否がらも守せよとつ
て教えられたる親切に兄にも似た想いを寄せた先輩諸
兄、仲間といふあたにかほ風吹かつゝ、んぞくれた阿諷
諸兄、若くしくエネルやツリムが活躍振りに驚嘆させ
られ私の出る幕はすんだのぢやないかと哀しがらせてくれ
た後輩諸君、そして私の傍や憧れを諸君豊かにそのつ
がらな瞳に、凜とした優美な姿体に溢れさせていく
れた馬達、今はお別れだ。

私の青春の豊な糧、馬術部に永永く栄光あれ。

雑感

田村雅英

ワカシマの花も四度咲き、そして四度散つていつた。この四度散るをふり返つてみると、余りよいしは事もしこいよい自分を羨望するだけであるが、とにかく四度散る馬と共に過す事ができたのは、大学生活に於ける最大の喜びである。又、四度散るハナムケの心もいえどろむ気がする。

目覚し時計にたたき起こされて、ぬむい目をこすりつゝ朝もやの中を自転車に乗るペダルをふんぞり望む。二時、そして馬の背にまたがった瞬間、ふと目に映つた紫雲の夕櫛の姿は、いつもはつと想ひ出す事ができる。

一年生の時と受けよこの新鮮な印象は決して忘れる事ができない。又、次天下に全自分とは二りにきみれてフオークをにぎりしめての乾草の匂い、作業者もふとぶつては全く染みかつた想ひ出の一つである。私は今の一年生の部員が乾草の匂いとはどんな作業者のか實際には殆ど知らない身は少なからず羨望に思つてい

クラブに入った勤続は人により様々である。しかし其々の部が試合というものと無関係でいる事は必ずある。さういふ部は、練習に励むという事は、必ず部員である以上オートの義務である。こゝろいふ部は、先づ練習と、練習は練習的部員であつたといへない。しかし練習と同様に、いわゆる作業者もそのを履き切滅を感度でやる事は全くゆるせぬ身である。勿論作業者の間が多しからうと云ふ事はあるが、馬の上にいた時同様に自分自身についていふなら、馬の上にいた時同様に作業者に於いては練習とを比べたら、おどろく作業者の間の方が多しのではないかと想われるべしである。一方部の自部部に対してしむければならぬ義務を課す事がかんじんである。

誰でも広い意味で、クラブに於ける生活を楽しむたのにクラブに入ったものであろう。しかし、多くの部員が以上を二には何種かの秩序があり、目的がある。さういふ部を作つていく上には一人一人には道があつても一つの目的に向つて進んでいかねばならぬ。そしてそこにはかなりのさびしさがあつてもかきわぬといふ事がある。確かに部生活は楽しいものであるが、ある程度はさびしさがあつてこそはじめて此がもたさくがるものである。そのさびしさに

耐之二とぞ、故大が北次馬部領としての誇りを獲つ
争がでざるのにはなしたるうか。

馬を可愛がろう

恩田正臣

重い荷物を載せた車をひいて、汗を流し鼻息も荒々
しく坂道を登つていく馬の姿には、いじらしいまごに
負側が、かかじい程に美しい、気の遠くなるような
イオミツクなバイタリテイーを感じる。と云ふのは我
々人間のイゴイハムである。お世の馬は、彼自身の
自由を奪われを奴隷であり、假令が規則に働くのは、
とうする方が善類が少いからである。

馬の丁次を繼いでみると、いくつかの原種と云うも
のがある。しかし馬の原種が自然の状態で生存してい
る例は殆んどなく、馬が今日まで生存しているのは、
人間に飼養され改良されてきたからである。

馬は戦場をかける家物として、荷物の運搬用として
又、牽引の力の、あるいは通信の手段として、種々の
目的で人間に使われその爲に人間から保護育成されて
きた。馬と人間との生活は一種の共生生活であり、人
間が使わなくなれば、馬は世界から姿を消してしま
うであろう。

現在日本に、馬は四七万頭、北海道だけで二三十万
位いる。家畜としての馬の用途は、鞍馬、乗馬、競
走馬、乗用馬である。その中で教の上からは前二者が
殆んどを占めている。機械文明の今日では、作業能
力能率の点から云つて機械力には絶対立打ちでさびい。
日本でもまだ使用としての馬が大部分を占めているのは
生産性の問題と、機械で補えない特殊性のためである
。しかしこれらのも階級の流弊の中ではやがて機械力に
よつて駆逐され尽してしまつたろうことが予想される
。それでは馬は不用のものとなり絶滅してしまつた
らうか？、農林省では各地にある種畜牧場において、
軽種馬の改良研究を行ふことは殆んど止めにしてしま
う。軽種馬も消えて行く運命にあるのぢやうか？、
又聞が畜産に発達すると、機械により人間の労力は
節約され、しかも大なる収益をあげられるやうになる
。人々の生活は豊かになり、余つた時間をもちあさ
るやうになる。いわゆるレジャー時代である。こゝら

社会では、娯楽やスポーツは生活の一部となり、必要不可欠なものとなる。又、文明が進む程、人々は自然へのあこがれと郷愁をいだく。

つまりスポーツは大象のものとなり、又その種類も、スケールが小さく自然と接触させるものが求められる。すでに我々でも一部ではレジャーゲームが始められてゐられる。スキー、登山、海水浴などのにせよ、これららびりてゐる。

これからは、乗馬が一般の人々の間で、改めて認識されるようになるであらうと思われる。前記の条件を充分に備えてゐるし、さらに完成。と云ふことのむじ旅行の深さ、と動物を相手にするといふ特殊性、しかもその動物たるや、一頭一頭に全く異つた魅力がある。と云ふ点で、乗馬をやり始めるときには必ずこれらとせよと云ふからである。

今にも乗馬チームがそこそこ存在してゐるのは、馬眼をかわりただけではあるまい。

もしそうならば、乗馬人口が今も乗馬もかえる、競技における選考層と競技馬の層が厚くなる、全体的に技術も向上する。

オリンピックには、うま／＼いる優秀な候補選手、候補馬から最優秀の人間が選ばれる、こうなつてこそ好成績が期待されるのである。乗馬がひろく一般に

支持され普及する途には、現在、馬術をやつておられる方が好きな方々の興さすべき役割は大い。

乗馬は現在非常に盛んであり、ファンも増える傾向にあると思われる。ヨーロッパに於ても日本以上に盛んらしい。日本では、華命でもおこなふ限り、乗馬は盛んになり、これぞ我々のことばおいと云う。農林省で乗馬の研究は止めることにしたが、実際には各組合や協会の方々が、熱心に優秀な種馬を輸入して、改良を行い、農林省としてやる必要がなくなつたからと思われる。

戦後には日本の馬は全体の数のよでは、現在の三分の一位に減るかも知れない。しかし競走馬及び乗馬としての種馬はほかにいえるものと思われる。馬を見てゐるだけで美しい我々には、馬がいなくなるといふことは聞くだけでも總えられぬ苦痛である。馬が絶滅しないように只利するだけでなく、我々もどうなるように積極的に働かせる必要がある。その第一歩は、馬を可愛いがることであり、馬の可愛さを他人にも教えることである。

馬が現状のようだと、自分だけで生きていけず奴隷のようにならば、逃げ込まれたのは、只々人間の責任である。その罪のつぐなひの爲にも馬を可愛いがらう。

* * * * *

私が初めて馬術に興味をもつて馬に乗り出してから五年になる。その間に、他人と競争し、押しわけ、又遠征に行つた。さぞで乗つたり、とにかくがめつて乗つて千騎にもなる。他の部員や先輩の、援助と嫌味の上にも可能であつたことを深く心にため、感謝してゐる。一つのことには、馬術を集中させた最後までやり通す、と云う自信を与えてくれたし、せいぜいはい活動し、せしく、思いきり生きることが幸福なんだと教えてくれた。

学生時代は今迄生きてきた馬術の中で、いちいちいだが、これ程多くの経験をしたことはない。全て馬術部にて行はれ、思つてゐる。ドロンゴの、又硬く乾燥した、あるいは雪の積つた馬場。逆光線の中で微風に葉を飛ばしてキラキラと白く輝いたホヱ並木。線道中のにわか雨には傘とびり愛は線道つくるエルムの老木。朽ちかけた、しかし何とも云えぬ守りなきを感じさせるオンボロ廐舎。乱雑でいつも汚くさいにおいがたつたさい、けれどももその椅子に腰を下すと、試験のつらさも金のかいのも、気志さえも苦痛に感じさせないでくれた部屋。愛し世話におつた馬房達。

北嶺、北身、北懐、北潭、北翠、北香はもういない。北飄、北翔、北派、北現、北辰はこれからの責任ある若寺。朝清、北楡、北楓は下級生を教育するベテラン

ン………

思い出すものは皆、染しんがつかしいことばかりだ。つらかつたこと、失敗したこと、腹のたつたこと、これらが皆おつかしいありがたいことに思える。全員の心に善悪を感じさせられる。馬術部での生活は精神の支えであり、学生生活の全てだつたとも云える。どんなに感謝してもしたりがい気持だ。だからと云つて卒業後に只過去の感傷にのみ生きたる人々にはおつかいにくい。新たな出発により、絶えず前向きにせいせい感じ生きたる気持を失わずに、新しい経験をして行きたい。馬に対する気持と、馬術の勉強は、環境に恵れられても一生続けるつもりである。



東京OB会

について

樋口 正明

五年前二十数名の有志で発足した会も、最近若いOBが年毎に増え現在会員五十名を数えるに達している。もつとも東京OB会といつても静岡を合否関東一円に手はがる広い地域を対象としたものになつてい

昨年夏の夏の総会で今後の幹事役を森本、志水両君のコンビにお願ひする事になつたので、この際、会の発足以来のことなどを心りかえつてみたいと思ふ。東京のOB会結成の際、基本方針として、現役編輯への物心両面での援助を一本化し好意したものとすること、会員相互の親睦をばかるといふことが決められ、取

算に会長をお願ひし、私が幹事となつた。そして実際の運営としては、OB会が会員から年々会費を集めこれを遠征資金の補助費にあててまゝである。三十一年誌発行、新馬購入の時など臨時に特別の資金を集めたこともあるが原則として現役諸君が個別に寄附集めに廻らなくては済むように会として窓口を一

本化する事にしてまゝである。

会員相互の親睦としては、定例化してきた忘年会の他に新会員歓迎会、遠征選手激励会、乗馬会、競馬を観る会、カツホロールを味わう会等々多岐である。また上京中の松本、半沢先生を囲んでの会も毎年平均三回程度の割合を持つてゐる。

そのうちでも遠征選手をまじへての会は札幌のハットニュースもどびだし話題も豊富でOB一同も若返り、かつて語り家に愉快なものである。

前年度は当時の選手諸君の活躍によつて壬辰決定戦で優勝した。その際、我々は、現役時代果たしえなかつた夢の表現に先輩の立場として微力を尽したことを記したものである。

スポーツ競技は勝つことより参加するのことに意義があるといつてぬても応援する者にとつては、選手がどの位活躍をするかについて無関心ではいられない、その程度によつて総の入れ方も変わってくるものである。たとへば、競馬に敗れたとしても、技術面での努力の差ならぬを文をいじつても、あつて悔まれるような作戦の失敗や、選手の不注意によるハコとで敗れるというふうなことは根柢の問題につきがるだろう。そしてこのさうな試合を観せられた場合のOBの惨めさはとてえさうも少ないのである。

この意味でも今後の現狀諸君の根柢ある活躍を期待するにせむのである。

市内の整備に伴う廢合、馬場の移転、新篇購入、調教場馬術部にとつて幾多の難問題がひかえてゐる今日、東京地区のみならず、全国的規模で〇Ｂ会が結束されるよう、大先輩の方々はじめ若い〇Ｂ諸君の尽力方についでよろしくお願いしたい。また現狀諸君はこの二つの実現についで積極的になつて努力してもらいたい。従来とかく東京〇Ｂ会だけについでても必要を運送がとられず幹事は泣かせたこともあつたので今後十分注意し將來に備えてもらいたい。

最後に、幹事としての五井園各方面の皆さんから頂いた御力とご指導をいただいたことについて、この機会に厚くお礼を申し上げます。また、私のいたらないためご迷惑をかけた方々に対しましてはごことに申し訳しなく思つてゐる。

在京〇Ｂ会幹事 仰せつかるの弁

森本博次

いふ／＼お八々が廻つて来たといふにこれまで裁判されて来た樋口さんには大変失礼になるが、何しろ自分の身を廻す事さえ廻うに任はられぬのに、他人様の外世話など到底出采ないと思つたが、とも何何踏までも樋口さんに迷惑をかかけられぬので、誰れか適當な人が出て来るまでカピンケヒンターの意味で、備とかがなごまかして思つて居る。

在京の〇Ｂ会が今日の隆盛を見るに至つたのは在京の〇Ｂの皆さんが御力が大きき方ではあつたけれどもやはり樋口さんの普通の人で出采ない振がご努力に因つてこそは誰しもが廻るものがある。

この意味をあらと受け継ぐものとして大変なことであるには間違いない。幸いにして、志水君が御力してくれるので志水君には失礼だけれども、二人で何とかやりなさいと思つて居る。今度幹事が変わることについて、小生にも部員に一筆書いと云われたが、余りに急ぎ話なので、具体的に今後こんな風に併せ話した

いということも悪い浮かばないが、今まで通りには出来
ずら議上と想つてゐる。只生采の馬好きなのか、馬に
乗るのは下手だが、馬に乗ることや、馬の話をすること
が好きなのか、とに角馬と名がつくと不審は余り氣
気がし、頼もしてはひびのこ、が然え氣が出て来るの
で、それが取り柄を何と一音で云えは困難な仕事を
案外やれるのではひいかと樂觀してゐる。

洋次先生が小生の顔を見れば何と云へば、馬術部
の現状について説明され、いろいろと苦言をなすつ
て語られるのを聞き、又現役の連中の話を聞くにつれ
終つて現役の嘆息して居る以上、状態は力、出来ら
れば、せめて馬に乗るとは位は余計な心配をしない
乗つてもらいたいと思つて居るので、その方面につい
ても物廣的だけでなく精細的にも何かとお役に立てる
ことが出来れば幸であると感じてゐる。

勿論、在京の巨会は單なる馬術部の後援会ではない
ので、あくまでも昔馬にきだがつて人間の高にある会
であることは申すまでもなく、その辺のところもよく
考へたいと思つて居る。

とに角以前から危機とルーデでは名前を売つた程で
あるから、どんな風にやるのかと云われても困るので、
とに角何とかやつて救済す。至らぬ處は是非に比擬
さだめと思つてゐる。

馬具報告

山村 勝

馬具の現在の状態を知つておくために、馬具台帳としてまとめてみました。

鞍：根毛ひびいたのは、北展用ので、北線が使用して
いたもので、以前から新調を叫ばれてしまつた
。踵も深くをボロがはみ出しにしまつたので、完
全に寿命と思われざる。その他朝清、北線用の
が腹帯タツカワが痛んでしまつたが、現在予備の
総台鞍一騎と練習鞍一騎が鞍靈の縫い糸が切れ
ているので、腹帯タツカワの修理中ですので、
これが出来上り次第、引を換えに修理に出すつ
もりです。他の技術鞍(予備)は二騎とも別に
使用出来ず、これらも寿命です。幸い、今春、
岡崎会乃佐台さん等の御好意で、学芸部より新
しい鞍が三騎位、入る予定ですので、大分余裕
が出来ると思ひます。

新調してしまつたので、解決すると思ひます。
水勒：北線、北線用に一組ずつ備え、出来るなら銜環
はステンレス製にと考えられています。それに水勒
の予備には線糸綱をしくは布製へはわける所
手綱には段々改のこけさといふ思ひます。
布製は、綱手綱には注文中。
腹帯：現在予備は一本もなく、ギリギリの状態です。
北線、朝清には早急に新しいのが必要です。新
しいのを4本注文中で一本修理中です。
鞍車：最も消耗度が増しく、やはり良版のものを欲し
いです。昨年十月に6本を新調して、北線、朝
清、北線が使用してしまつたが、仲又好調です。
予備1本のうち満足なものは2本、修理に二ツ
がハヤのちるものが9本、何とかわえさずが、
なるべくから、これらは使用せず、良いものと
交換して置くつもりです。
引綱：各馬一本づつで、予備4本、各馬2本づつがこ
れぞりにおつてしまつたのは遺憾です。もつと
大切に取扱つて下さい。近日中に新調して各馬
2本にしませう。

頭絡：縫製のモクミと華製を併用してしまつたが、華製
は平均二ヶ月で切れ、縫製は寿命約五ヶ月です。
その他、マルタンガール、ド、ミヤツスの用具が二組、

続不帰の季節

三浦 亨 郎

白い忘却の上に新しい忘却を積み重ねる時は流れ 季節は巡つて行く。それが幾万年もの昔から言われてきた人間の「生」の姿であり、われは青春の端であるのかも知れまい。

しかし、ともあれ、この今日の日に幼少時代の一つの季節が終焉し、それそれ新しくもまた春を迎えぬば春の訪れがやうに来るのである。

再びは忘却を許しこれゆめ時の谷間に、今はしほし立ち尽し、凍こつた雪道から北國の淡い春が萌え出すまでのことやかな一時を、この上さくいとわしく思ひめぐらすことこそしよう。

われわれは自己を憐れむ。記憶の中へ歸つて行き、そして今は、忘却の世界に死に果て、しまつた孤傲や沈黙、この身を細く細く思ひ出し、此の糸にたぐつて、この「別離」の意味を知らなければならぬのだ。

「不帰の季節」は今、そのフェールを下して去る。明日には訣別を告ぐべき世界でしかなさぬ。とまれ、われらが愛を巡りて生きた四季の歲月は、はかなくもキラキラに輝く小さな世界ではあつた。

その身をめぐつてわれらの青春の花が咲き歌が生れたのである。
限りなき季節の交感、

春は花と光の中に憧れや、願いやを宛めて若々しい息吹きに溢れて歸つてくる。
秋は舞い散る銀杏や

スベード型の水カサの葉陰に
雨は遠くを旅人の思ひを知る。

静かな聲に、冬が来る

やすらぎと懐しさが帰つてくる。

こうして季節が回旋つた。白い手袋で敬礼した時、五月のさんさんたる陽光の中に銀色に染つた寺楯の連山があつた。

香の野辺を埋めつくしたタンポポの眞花や、初夏に輪の森を飾つたつ、さし野茨の白じ花々にほくらは何と誇り高き美人であつたでせうか。うさごやしの白じ花環を今はこま北嶽の首にかけ、線路道を歩いて行つて記憶も影絵のよろに郷愁の霧の彼方に霞んでしまつてゐる。

夏のはじめ、それは僕らの始めのこの台福でもあつた。薄暗い農林庫の二階にムシ口ばかりの窓があるばかりだが、われらは何と穿けた同種同族の生活を送つたことだろう。怒鳴られどろし、竹さぶろして、一日が終ると河と城の中に平和な飛羽感が生れ、われらは愉の木陰の冷えがえじしと青草に浸るゝ。天窓のその白じを知つたのでつた。そしてわれらはあれ以来、北国の憂鬱に満ちた自然のリズムをたんだんさかなくなつて行つたのではなからうか。

あのわれらの世俗を絶して透明な心を穿つたの中に寝おしめた、輪鐘の蔭の青い広場に今は二トトリ共がこうせんと歩きまわつてゐる。

その寂しい笑いと共に、移り行く時の前に頭をたれ、新しい糸糸のためには脱帽する謙虚さを勉めものこと恥を知らねばならぬのだ。別離の意味とは、新しい明日への挑戦の調でなかつたか。

ゆら／＼と早春の海を見る如く乾草の馬車は行く。天窓の豊饒な緑床で、われらは何處も／＼木々の梢がかさならす爪の子守唄に耳傾けたものであつた。往く爪が秋の復りを運んでくる頃、西空の笛を仰ぎながら牧草地の奥から馬車をひいてきた右のたつた。

赤づるが尽きるとトカシラの並木道、そして更に細い道が尽きると広い牧草地になる。秋も深まる頃、遠い晴々だけが白い衣をきとつた。われらはさく乾草の山が点在する草原を思ひ思ひに馬を馳つた。

香は北国の心である。吹雪は北国の野性である。物置の光る夜更けにうすぬまり色のヴェールにつつまれて走り去つた愛しい女のよろに、われらの青春は走り去り、そしていつかは、後輩諸君の青春も来れ尽きてしまつた。あの石道りの小さな部屋に、群れつとつて、ストーヴをかこんだ仲間達のぬくもりも、誇らしいの懐しさも、涙

ぐんぐんわらわらにば さよらおらも言はずに今日の日々その身限りとする。

われらは胸の中で崩れて行くものを知つてゐる。俗塵を浴びて邪悪なものが粉塵に流されて泥水の昔にたえつて行く。

悲寂も苦悩も 雪崩のさうに記憶の眼をへ流して行き、それは 崩れ去る古城にも似てゐる。

その胸 裂けやうやうと首をたてて流れだし、それはわれらが生命溢るるさに 魂を燃焼させた共通の広場をめぐつて流れ、一人、一人の心に響きの灯をともすのだ。

我つて行くを愛馬達！、今はその名を教えよう。

北さんであつた、北斗であつた、北島も並ぎ、北翠も北嶺も並つた。懐しい名は われらの心のひだ深くに眠り込んでしまえ！

今宵は われらが 死者としてそれぞれの國へ旅立たねばならぬのだ。

追コンとは四耳生の弄式を意味する。

われらは二度と再び生者としてこの馬術の青春を生きたることは許されぬ遠かな國へ旅立つのである。

それぞわれらは永業と時が。

その永業と現在との断絶を埋めるために 真があり、別離の歌があるのだ。

数々の合宿、数々の試合、そして春秋を四度送つた日々の部生活の中に、まさしく無数の記憶が堆積し出し出が錯綜してゐる。

こうして様々の記憶を縦横に瀟灑し続けて、われらは過去から永業への意味を問わうとする。馬術部に入るとわれらの青春は一体どうなつたのか。しかも記憶の波は白傷の跡をめぐり、痛みの悲哀はその沖合遙かに輝がまつてしまつてゐる。

今われらがこの席から振り返るとき、すべての思い出がまぐいびき家であつた。そこには青春の一回性への感慨があるばかりである。

馬小屋をめぐつてわれらは実に様々なものを学んだ。部生活をかかしては水め術をかつたもの、そうして空石のまうに輝く、良きものを、を大切に身につけて、ぼくらは永業へ向つて歩いて行く。訣別とは新こき明日への挑戦

を意味したのだ。

そして新しき明日とは われら一人一人が歩いて行く人生の軌跡であり、その足跡のどこかに二人は馬術部生活の裏りを見出すことであろう。

われら馬部が好きである、より以上に馬術部の糸系が好きである、なぜならばそれはわれらの青春から生れ、われらの青春もまたその中に生きて躍動し続けるものでもあるからだ。

当番よ、遠征よ！ 台座よ！そして涼しげな驢の鞍馬達、今はお別れだ。

そして後輩諸君、この最後の宴を有難う。

ほくらは忘れぬ。それは木犀の季節であった。

再びは生きていることのみ日々でありた。

そして先輩の方々、ほくらも後に続きます。

拓かれた糸系へ向つて、りんせんと、歩いて行くのです。

糸系よ

希望よ

権れよ

わたしの小さな翼をのっめ

そしてわたしは、うたうたろう

大きな顔屋に

さめながら、とびながら

なお高く、なお遠く

昭和三十九年二月二十九日